

# モンゴルの口承文芸ホーリンウリゲルの 語り方に関する考察

モンゴル ジンファー  
蒙古 貞夫

## 1、研究動機と研究目的

日本人研究者によるモンゴル口承文芸の研究は、長年にわたって多くの業績を蓄積してきた。その中でも、蓮見治雄氏は、モンゴルの口承文芸に留まらず、モンゴルの言語、モンゴルの馬、モンゴル詩文、モンゴル相撲など、モンゴル文化の全般に対して深く研究を行い、多くの参考資料と理論を残した。とりわけ、蓮見氏が『チンギス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』という著作において、初めてモンゴルの口承文芸である「ホーリンウリゲル」を紹介したことは、日本語で記録した最初の資料として画期的な意義を持つ。

本書の記述によって、「1985年3月、内モンゴル出身の「ドルジリンチン」という叙事詩の語り手は、中国・内モンゴル自治区の歌舞団の一員として来日し、日本の本土で初めて擦弦楽器のドリボンウタストホール（四つ弦を持つ楽器）を弾きながら、モンゴルの口承文芸ホーリンウリゲルの脚本を披露した」という価値のある情報が得られることは、ホーリンウリゲルを研究している筆者にとって重要かつ貴重な資料になる。

しかしながら、上述した著作の内容を通覧したところ、彼が解説した「ホーリンウリゲル」に関する文章の中には、不適切な点が随所に見られる。それゆえ、ホーリンウリゲルを家族で継承する家計5代目の継承人であり、研究者としてもホーリンウリゲルを考察してきた筆者は、現存の文献資料と現役のホールチに対する聞き取り調査によって得られたデータを活かして、次の二点を明確にし、より緻密な研究理論を提供して行きたいと考える。

第一は、蓮見氏が解説した「ホーリンウリゲル」に関する文章に見られる不適切な箇所を検討・分析・書き直した上で、ホーリンウリゲルの表記を中心に検討し再解釈する。

第二は、蓮見氏が解説した各項目をホールチたちが語る際に、実際にどのような詞牌と曲牌を使って視聴者に伝えるのかということを明らかにする。具体的には、ホーリンウリゲルの語り方を論じるため、村上正二氏の訳注した『モンゴル秘史』（詞牌にする）という口承文芸の主要内容を示しながら、最初の「英雄の登場」から最後の「立派な勇士を讃える」までの語り方を考察する。

## 2、蓮見治雄氏の解説に見られる不適切な点とその具体的な分析

本書で蓮見治雄氏は、モンゴル人が生活している各地位に語り継がれている多種多様な口承文芸を「語り物以外」(12種類)と「語り物」(9種類)の2種類<sup>(1)</sup>に分類した。その中で、本研究の分析対象である「ホーリンウリゲル」という口承文芸は、「語り物」に属す9種類のひとつとして位置づけられており、以下のように解説<sup>(2)</sup>されている。

ホーリン・ウリゲルという語り物もある。これは内モンゴル東部のジェリム、ジョー・オダ、シリン・ゴル、ホロンバイルなどの盟(行政単位の一つ)で、現在も盛んに語られており、発展途上にあるといってもよい。これはホール、つまり四胡、二胡、馬頭琴などの楽器の伴奏による物語の意で、私が入手した資料を整理してみると、一四一編の詞と曲からなっており、次に示す項目ごとに、詞も曲も異なっている。①英雄の登場、②英雄が甲冑を着けてその乗馬に鞍をつける、③会議を召集する、④王が世の様をみるため御下向になる、⑤大臣がお答えする、⑥王の御機嫌を伺う、⑦美人を讃える、⑧軍隊が出動する、⑨輜重隊の出発、⑩行軍時に危険に遭遇する、⑪將軍の戦鬪、⑫情報を届ける、⑬告訴、⑭一人旅、⑮徒歩の旅、⑯悲しみの旅、⑰故郷を離れる、⑱帰郷、⑲故郷を懐かしむ、⑳立派な勇士を讃える。これを見ると、このホーリン・ウリゲルという作品は、土台に伝統的な叙事詩その他の語り物をおいて、さらに今はほとんどなくなってしまったベンセン・ウリゲルなどを吸収して発展してきた語り物といえそうである。

上記の内容を読んで、ホーリンウリゲルという口承文芸に馴染んでいない人は、違和感がなく非常に分かりやすい文章だったと評価するかもしれない。しかしながら、長年にわたって舞台上でモンゴル民謡・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルを実演してきた筆者にとって、蓮見氏の解説には以下のような不適切な点が見られるので、その具体的な内容を示しながら分析して行きたい。

第一は、上記の資料に解説されている「内モンゴル東部」という言葉が不明瞭であり、最も詳しく説明する必要があると考える。例えば、満州政権が建てられた後、従来のモンゴル領土である16の「アイマグ」を分配して6盟49旗となった。その内訳を示すと、ジョソト(卓索図)盟の5旗、すなわち、現在の遼寧省の西部・赤峰市の一部・モンゴル国東側の一部、ジリム(哲里木)盟の10旗、すなわち現在の通遼市とヒンガン(興安)盟の一部、ジョーオダ(昭烏達)盟11旗、すなわち現在の赤峰市の領土とほとんど一致している範囲、シリンゴル(錫林郭勒)盟10旗、ウランチャブ(烏蘭察布)盟6旗、すなわち現在の烏蘭察布市、イクジョー(伊克昭)盟7旗、現在の鄂爾多斯市のようになる<sup>(3)</sup>。なお、鈴木仁麗氏(2012)が著した『満州国と内モンゴル』という著作には、「内

モンゴル東部とは、清の崩壊後、外モンゴルが独立して、中国領内に取り残された内モンゴルの東側を指し、満州国に取り込まれたモンゴル地域の全域を指して用いる」と解説している。

一方、本書で言う「内モンゴル東部」は、氏の著作が刊行された1993年を基準とすれば、もともとジリム盟とジョソト盟の版図から近隣の遼寧省・吉林省・黒龍江省に分属された領土は含まれていないので、その解説は曖昧であり、読者に誤解されやすい内容があったことが確認できる。特に、ホーリンウリゲルという口承文芸を解説するとき、その発祥地として公認されているジョソト盟・トゥメット左旗、すなわちモンゴルジン旗、現在の遼寧省に所属されている阜新モンゴル族自治県を明確に表示しなければ、ホーリンウリゲルの研究上で大きなミスになると考える。

第二は、上記の資料に「発展途上にある」という表現があったが、それはホーリンウリゲルの発展過程に合わないものである。例えば、蒙古貞夫(2020)は、変容という視点からホーリンウリゲルを考察したところ、本書が出版された1993年前後の時期(ドルジンチンという叙事詩の語り手が来日した1985年も含む)は、ホーリンウリゲルという口承文芸はその繁栄した時期を経て、次第に衰退化が始まった現象が見られたと言える。その主な理由は、東部モンゴル地区で「モンゴル劇」が成立し、ホールチたちは以前の主役から次第に舞台の裏で伴奏する役を演じ始めたからである<sup>(4)</sup>。

第三は、上記の資料に「二胡と馬頭琴」はホーリンウリゲルの伴奏楽器であると表記しているが、それは根拠がない言い方に過ぎないと判じられる。その理由は、蒙古貞夫(2020)の研究によると、吟遊詩人のホールチが低音の擦弦楽器ドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で長編の英雄叙事詩と歴史小説を語る上演形式が定形化する前の清朝期には、確かにモンゴルの説唱芸人たちは、馬頭琴の形とよく似ている「チョール」(潮尔)という擦弦楽器を使って英雄叙事詩と歴史小説を語っていた時期があった。しかしながら、現有のモンゴル語・漢語・日本語の史料・資料には、二胡がホーリンウリゲルの伴奏楽器であり、ホールチたちが二胡を弾いて長編の英雄叙事詩と歴史小説を語っていた記録はまったくない。また、調査協力者である現役のホールチに聞き取り調査を実施した所でも、二胡を使ってホーリンウリゲルを実演するホールチの様子は見たことがないという<sup>(5)</sup>。

第四は、上記の資料に「私が入手した資料を整理してみると、一四一編の詞と曲からなっており、次に示す項目(上述した引用文に書かれているホーリンウリゲルの語り方を指す)ごとに、詞も曲も異なっている」という表現があるが、入手した資料の内訳を明示していないので、その資料の信憑性は疑問される。とりわけ、筆者が聞き取り調査を実施した結果によると、ホーリンウリゲルの詞牌の大多数は、モンゴル民謡、諺、成語、故実、ホルポー、ウリゲルトドー、マニインマガタラなどの文芸作品から抜粋して円滑に使用す

ることが確認できる。また、曲牌については、主に民間音楽、寺院音楽、宮廷音楽を用いていることが分かるので、ホーリンウリゲルの詞牌と曲牌を合わせると、蓮見氏が強調する「一四一編」は、ホーリンウリゲルの詞牌と曲牌の一部に過ぎないと判断できる<sup>(6)</sup>。

第五は、上記の資料に「ホーリンウリゲルの語り方に順番を着いた①番の「英雄の登場」から②番の「立派な勇士を讃える」まで語る」と解説しているが、ホーリンウリゲルの脚本を語ることは文学作品を読むことと異なるので、蓮見氏が順番をつけたことは不適切である。例えば、氏の記述によると、ホーリンウリゲルを語る時、その初めに「英雄の登場」という場面を演じる必要がある。しかしながら、ホールチに聞き取り調査したところ、「ホールチたちがホーリンウリゲルの脚本を語る時、文学作品を読んでいるように、直ちに「英雄の登場」を語るのではなく、その前に固定化した前口上を語って本番に入ることを準備し、来場した聞き手のレベルなどを測るといった作業を行ってから現状に合わせて次第に物語の主題に入っていく」という<sup>(7)</sup>。

第六は、上記の資料に「今はほとんどなくなってしまったベンセン・ウリゲルなどを吸収して発展してきた語り物といえそうである」という表現があった。しかしながら、筆者の聞き取り調査の結果によると、「ホールチがベンセンウリゲルを語る時三つの説唱方法（パターン）があると言うが、まず一番目は、伴奏楽器を使わない状態で本子に記録している内容を一字一句で説唱する方式。次の二番目は、伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて本子に書かれている内容を語る方式。最後の三番目は、伴奏楽器を使わない状態で本子の内容を王侯貴族や非識字者に朗読する方式である。そして、この三つの方式は、時代の変遷に伴って変化しているようであるが、完全には絶滅していない」という。それゆえ、蓮見氏が断言した「ベンセンウリゲルはほとんどなくなった」という表現について納得はできないが、上記の三つ方式の中の一つはほとんどなくなったと言っているのではないかと考える<sup>(8)</sup>。

最後に取り上げたい不適切な点としては、上記の資料に書かれているモンゴル地名や一種の口承文芸を記す学術専門用語の真ん中にわざわざ「・」を入れて隔離させる表記方法である<sup>(9)</sup>。もちろん、現存の資料によると、蓮見氏の著作に「ホーリン・ウリゲル」と書き出したことに限らず、バトル（巴特尔）氏の「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格の動態研究：「科尔沁」地域を中心に」という論文には、漢語表記の「胡仁・烏力格」と日本語のカタカナ表記の「フーリン・ウリゲル」の二つ表記が書かれている。そして、その共通点を整理すると、両方とも学術的な専門用語として使う「ホーリンウリゲル」という言葉の表記に、わざわざ「・」を入れて分離させていることである。

筆者は、一種の口承文芸を表現する専門用語にわざわざ「・」を入れて表記することは適切ではないと考えている。その理由は以下の二点で要約したい。一つは、モンゴル語で「ホーリンウリゲル」と呼ばれているこの言葉は、専門用語として吟遊詩人のホールチが

低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を指しているので、モンゴル語の「ホーリン」と「ウリゲル」の間に「・」を入れると、確かに上述した「ホーリン・ウリゲル」「フーリン・ウリゲル」「胡仁・烏力格尔」のような形になるが、このように「・」を入れると、二つの言葉のように感じられるほか、専門用語としての意味がまったく変わってしまうからである。

もう一つは、モンゴル語の「ホーリンウリゲル」という言葉を分解すると、名詞の「ホール」、格助詞の「ウン」、名詞の「ウリゲル」の3つに分けられるが、名詞の「ホール」は、モンゴル民族が有するすべての楽器を指す総称であり、格助詞の「ウン」は、特に意味を持たないが、名詞と名詞を繋ぐ時に使われ、残りの名詞「ウリゲル」は、モンゴル民族が有するすべての物語・昔話・民間小説を指す総称の意味を持っているので、一種の伝統芸能を現す名称とする「ホーリンウリゲル」の間に「・」入れると、モンゴル語の文法に違反していることが考えられる。

### 3、蓮見治雄氏の解説とホーリンウリゲルの語り方

ホーリンウリゲルの語り方は、各地域の社会環境、ホールチのスタイル、各種の脚本の構成によって、その語り方が随時変わる流動性を持っているが、基本的な語り方は、冒頭の引用文に書かれているように一貫して語る必要がある。それゆえ、上記の解説に従うと、ホールチたちは『モンゴル秘史』を説唱するとき、まず巻1「チンギス・ハーンの源流」の初めに書かれている「一、上天からの定命によって〔この世に〕うまれ〔出〕た蒼い狼があった。その妻は白い牝鹿であった。大湖を渡ってきた。オノン河のブルハン岳に住居して、生まれたバタチカン〔という名の子〕があった（省略）」という基本的な内容、即ちモンゴル民族の祖先たちの系譜を紹介する必要がある。

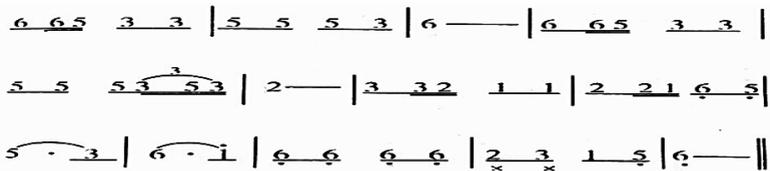
しかしながら、ホーリンウリゲルの脚本として語る『モンゴル秘史』は、文学作品を読むことと異なるため、ホールチたちは「祖先の系譜」という段落を語る前に、韻文体で構成した言葉を使って「前口上」を語り、当該地域の環境や、ホールチを招待した家庭の家族を賛美し、当日に説唱する予定や事前に約束した脚本のタイトルおよびホールチ自身の状況を聞き手に紹介する必要がある。そして、ホールチたちが「前口上」を語るとき各々の所要時間は異なるが、原則として5～6分、10分を越えない程度が適切だという。その理由は、前口上の部分が長すぎると、来場した聞き手たちがいらいらして聞きたくなくなってしまう一方、短すぎると、聞き手たちは意味が分からないまま物語の内容に入ってしまう恐れがあることが挙げられる。

このように巻1の内容を語り始め、赤ん坊としてのテムジンは右手に碑石のような血ごりを握って生まれる。しかしながら、残念なことには、少年のテムジンは次々と、父で

あるイエスゲイ・バアトルの死および集落の崩壊など様々な不祥事や困難に出会うが、賢い母であるホエルン夫人の教誨や兄弟と友人たちの援助を得て、すべての困難を乗り越え、モンゴル草原をリードできる英雄のように成長し、「テムジン・ハーン」としてモンゴル貴族の人々に擁立された。

なお、父の仇を討ち草原を統一するという野心を持つテムジンは、何十年もの奮闘によってモンゴル高原上のすべての集落を統一したので、ホールチたちは『モンゴル秘史』を語る際、前述した祖先の系譜の「前口上」という段落を語り終えると、丁寧に物語の内容に入って語り続ける必要があるが、『モンゴル秘史』という口承文芸は、言うまでもなく長すぎる。そこで、本稿では、ホーリンウリゲルが持つ流動性に従って、『モンゴル秘史』巻8の202に記述されている、「かようにして毛氈の幕帳に住まいせる国民をば〔ことごとく〕服ろわせて、寅の歳オナン〔河〕の源に集いして、九つの脚ある白い蘘をうち立てて、〔大クリルタイを開き〕チンギス・ハーンにハーンの称号をここにおいて〔正式に〕捧げる〔奉つ〕た〔のであった〕」という段落、すなわち氏の言う「英雄の登場」に相当する場面から紹介したい。

この段落の内容は、単なるモンゴルハーン国が建国された画期的な時期でなく、モンゴルという名前が集落の名称から世界の舞台に出て、民族の名称として正式に成立した重要な段落のため、ホールチたちは威厳があり厳粛な声でその場面を聞き手に語り伝えることが重要である。なお、蓮見氏の言う「英雄の登場」は、ホールチの間に「ウリゲルイヒレゲアイ」（開篇曲）に相当するため、この段落を語るとき多くのホールチは「ホーリンウリゲルの曲牌1」を使って表現していることが分かった。



【ホーリンウリゲルの曲牌1】

このように「英雄の登場」を語り終えると、続いて「②英雄が甲冑を着けてその乗馬に鞍をつける」に相当する段落、すなわちモンゴルハーン国のハーンに擁立されたチンギス・ハーンから功臣たちを「万戸」「千戸」「百戸」に冊封する段落に至ると、文武百官の名前を呼び出して封賞し、祖先たちの功績を讃えるなどの儀礼を行う。ホールチたちはそのような儀式を行うことを「トゥヘゲトゥルグ」と呼び出し、遼寧省地区で主にチエンブル（却恩布勒）・ホールチが使っていた伝統的な曲牌「ホーリンウリゲルの曲牌2」（点網曲）を用いているという。

||: 5 5 3 2 | 2 2 3 6 | 2 — | 5 5 3 2 |  
 2 2 3 6 | 2 — | 2 2 7 7 | 6 6 6 7 1 |  
 2 — | 6 6 7 6 6 | 3 3 5 6 | 2 — :||

【ホーリンウリゲルの曲牌2】

チンギス・ハーンはモンゴルハーン国を建てた直後、軍隊を出して森の民であるコリ・トマト部族を攻撃し降伏させたので、直ちにモンゴル人と代々の仇である金国を攻撃して長年にわたって蓄積した恨みを晴らそうと出征した。出征する前に、モンゴルハーン国の内部を安定させるため、多種多様な実験を行った後、蓮見氏の言う「③会議を召集する」をして金国を攻撃する方策を考えた。このような会議は、当時のモンゴル人にとって非常に重要な意味があるので、ホールチたちはこのような会議している場面を「チョーホラゲ」と呼び、語るとき主にオリシゲ（敖日西格）・ホールチの使っていた曲牌「ホーリンウリゲルの曲牌3」（上朝曲）が頻繁に使用されるという。

6 i i 2 | 3 5 5 3 | 5 3 2 i | 6 i . |  
 2 2 3 5 | 2 i 6 i | 6 5 3 5 | 5 — |  
 3 5 5 6 | 6 i i 2 | 3 3 5 6 | 2 — |  
 5 3 3 2 | 5 3 3 2 | 3 2 2 1 | 1 — ||

【ホーリンウリゲルの曲牌3】

チンギス・ハーンは金国の民の所へ出馬し、撫州を取り、野狐嶺を越え、宣徳府や居庸峪などの要塞を奪ったので、金国の丞相であるオンギススは金の皇帝に「我が国の勢力を保存するため、公主をチンギス・ハーンに与え、黄金・白金・緞子を上げてモンゴル兵士を慰めよう」と進言した。金の皇帝は丞相の建議に賛成したので、チンギス・ハーンも一時的に下向、すなわち蓮見氏の言う「④王が世の様をみるため御下向になる」をして美人と金銀財宝を持って、金国の領土から軍隊を退出させて、本営であるモンゴル草原に戻る。この段落を語るとき、両軍の立場を考慮する必要がある。特に、敗戦した金の側は、勝利したチンギス・ハーンを頼っているのもので、一部のホールチは「ホーリンウリゲルの曲牌4」（審案曲）を使って両軍が交渉している状況を表現しているという。

3-5    353 | 3-5    6-6 | 6-2    i65 | 6    — |  
3-5    3535 | 3-5    6-6 | 6-2    i65 | 6    · 0 |  
3        3-2 | 332    i-2 | 332    i-3 | 236    2 |  
6-2    i65 | 6-5    3-5 | 6-2    i65 | 6̇    0 ||

【ホーリンウリゲルの曲牌4】

しかしながら、金の皇帝は、宋朝をも帰順さすべく差し遣わしたジユブカンを始めとする多くのモンゴルの使臣を抑留したので、チンギス・ハーンは金の皇帝は約束を守らず、信用できない人だと判断し、また黄金貴族のメンバーと將軍等を集めて会議を行った。そこで、このような会議のとき、蓮見氏の言う「⑤大臣がお答える」、すなわちチンギス・ハーンが貴族のメンバーと將軍に金を攻撃しようと提案すると、モンゴルのノヤン（大臣）たちがそれぞれの意見を述べる場面である。この段落を語るホールチは前述した「ホーリンウリゲルの曲牌3」を使って表現しても語れるという。

チンギス・ハーンを主とするモンゴル貴族のメンバーとノヤンたちが、金を再び攻撃するかどうかについて討論しているとき、ノヤンたちはチンギス・ハーンの表情や言葉に注意しながら発言する微妙な場面があるので、ここで蓮見氏の言う「⑥王の御機嫌を伺う」という段落を語ることになる。そして、ホールチたちが実際に「ノヤンたちがチンギス・ハーンの表情を観察している」段落を演じる際、様々な表情を出す、歌声を低くする、小さい声で語るなど芸術的な技法を使用して聞き手に会議の場面を伝える。

とりわけ、金を攻撃して恨みを晴らすことは、チンギス・ハーンだけでなく、モンゴル民族においても非常に重要な戦役である。それゆえ、黄金貴族のメンバーと権利があるノヤンなど大勢の人々が会議に参加するため、ホールチたちがそれぞれのノヤンを区別できるように随時に声を変える必要がある。なお、このような大事なことは必ず会議をして決めるため、前述した「ホーリンウリゲルの曲牌3」を使って語ってもよいという。

一方、物語の世界、つまりホールチの意思によって随意に変化できるホーリンウリゲルの語り方には、エピソードが常に出現するのは当たり前のことである。ちょうどチンギス・ハーンが金を攻撃することを決定して出征しようと乗馬したとき、その前の条件としてチンギス・ハーンに与えられた金の公主が、ゲル（天幕）から出てきて休戦することを説得することも有り得るので、ホールチたちは「ホーリンウリゲルの曲牌5」に変えて、蓮見氏の言う「⑦美人を讃える」（誇小姉）ことに変換することができる。

1・6 1 2 | 3 6 5 2 | 3 — | 3 2 3 5 |  
6 6 5 3 5 | 6 6 5 3 5 | 6 6 i 3 5 | 6 — |  
3 3 5 5 2 | 1 6 1 2 | 3 5 6 5 2 | 3 — ||

【ホーリンウリゲルの曲牌5】

しかしながら、金を再び討伐することは、モンゴルハーン国の国事として決められたことなので、簡単に変えられないのが現実である。モンゴル軍は金の潼関を目指して再び出征した。この時、蓮見氏の言う「⑧軍隊が出動する」という段落になるが、金の皇帝はモンゴル軍が再び出兵した情報がある將軍から聞くと、直ちにイレ、カダ、ホボゲトル3人の將軍に金軍の指揮権を与え、応戦するように準備し始めた。この段落を語るとき、ホールチたちはモンゴル軍が迅速なスピードで再び出征する様子を普段より最も速い「ホーリンウリゲルの曲牌6」（出征曲）を使って表現する一方、聞き手に緊張感を持たせるように演じる必要がある。

1 2 3 2 | 3 — | 3 2 1 2 | 3 — |  
 3 2 1 2 | 3 5 5 i | 3 2 1 2 | 3 — |  
 3 3 2 1 2 | 3 5 5 i | 3 2 | 1 — |  
 ( 0 × × | 0 × × | 0 × 0 × | 0 × 0 × ) ||

【ホーリンウリゲルの曲牌6】

特に、上記の段落で出現する金の側の將軍の身体の様子、金軍独特な服装、將軍等が使用する兵器および金軍とモンゴル軍や金の將軍とモンゴル將軍の相違点、両軍の輜重隊の準備状況などの情報を来場した聞き手にはっきり分かるように伝える必要があるので、ここで蓮見氏の言う「⑨輜重隊の出発」という段落が登場する。そして、ホールチたちは輜重隊の出発する雄大な場面を語るとき、楽器の弾き方を調整してリズムを緩める一方、威厳がありながら力強い「ホーリンウリゲルの曲牌7」（將軍令）を使って語ることが聞き手にきちんと伝えられる。

3 3 5 2 2 | 3 3 2 2 | 3 3 2 6 2 | ( 5 5 5 ) |  
 5 5 6 1 | 5 3 3 2 | 3 2 2 3 5 | 5 — |  
 ( 5 5 5 ) | 6 6 1 5 5 | 1 6 5 5 | 3 5 2 2 |  
 2 — | ( 5 5 5 ) | 2 2 3 5 | 5 5 1 6 |  
 2 3 6 5 | 5 — ||

【ホーリンウリゲルの曲牌7】

金国に対する討伐戦を終え次第、チンギス・ハーンが指揮するモンゴル軍は、新たな対戦対象であるサルタウルの民に出征することが決まった。モンゴル軍は幾つかの路線から出発して包囲殲滅戦をする戦略を実施したが、チンギス・ハーンの本陣の先鋒将軍であるシギ・クトゥは、サルタウルの大將であるジャラルディン・ソルタンとメリクの2人からの強い反撃を受け、モンゴル軍は打ち破られてしまい、敵軍がチンギス・ハーンの本陣までに攻めてきて、チンギス・ハーンの本陣は一時的に不利な状態に陥った。それゆえ、ここで蓮見氏の言う「⑩行軍時に危険に遭遇する」という段落を語り続けることになるが、ホールチたちは常に「ホーリンウリゲルの曲牌8」（行軍曲）を使って実演しているという。

||: 3535 3532 | 5・6 2 2 | 5 6 i 6532 | 2 ( 5 5 5 ) |  
5 5 3 5 5 6 | 2 2 2 | 5 5 5 6 1 | 2 5 |  
2 1 6 1 2 | 5 — | 5 6 2 2 | 6 1 6 1 5 :||

【ホーリンウリゲルの曲牌8】

この一髪千鈞を引く危険な時期に、モンゴル将軍のジェベ、スベエティ、トクチャルの3人は、前述したジャラルディン・ソルタンとメリクの2人の将軍の背後から攻め入って彼を破り殺したので、チンギス・ハーンの本陣は安全な環境に戻った。このような両軍が対戦する場面をホールチたちは「ジャンジュンバヤラダホ」と呼び、蓮見氏の言う「⑪将軍の戦闘」に相当する部分を指して、実演にあたってホールチは楽器の弓を上手く調整しながら加速させ、非常に速くかつ激しく「ホーリンウリゲルの曲牌9」（交戦曲）を使って対戦の場面を聞き手に深い印象を残すように語る必要がある。

3 5 2 2 | 3 5 5 | 3 5 2 2 | 3 5 5 |  
6 5 6 5 | 6 5 6 | 5 5 2 2 | 3 5 5 |  
6 5 6 5 | 6 i i | 6 i 5 i | 6 i i |  
2 2 2 2 | 3 5 5 | 6 5 6 5 | 6 5 6 |  
5 2 2 | 3 5 5 ||

【ホーリンウリゲルの曲牌9】

なお、上記したモンゴル軍が行う包囲殲滅という戦略の結果が現れ、別の路線からサルタウルの人々と戦う軍隊からチンギス・ハーンの本陣に新たな情報を届けるストーリーは、ホーリンウリゲルの語り方によく見られるので、ここで蓮見氏の言う「⑫情報を届ける」に相当する場面が語られることになる。特に、両軍が対戦中の貴重な情報を送るとき、当

時の主要な方法は駿馬に乗って口頭で報告することであるため、この段落を語る時、ホールチは駿馬に載っている兵士が急いで馬を走らせている様子や目的地に着いた後の報告内容をきちんと表現する必要があるので、多くのホールチは前述した「ホーリンウリゲルの曲牌 8」を使用して語っているという。

戦争と言えば、古代と現代を問わず、戦略を計画することが重要である。それゆえ、『モンゴル秘史』はチンギス・ハーンの功績を讃えることを主とするとしても、敵国の情報を明確に聞き手に伝えることが、実際に物語を語っているホールチにとっては、重要であり工夫しなければならない部分となる。例えば、チンギス・ハーンは両軍が対戦中に、敵軍の指揮者を戸惑わせる情報を放って、敵軍の中から崩壊させる心理的な戦略を使うため、敵軍の陣営にあるリーダーの将軍はモンゴル軍に引き入れられたという事件が起きる。つまり蓮見氏の言う「⑬告訴」に相当する事件が起きたとき、ホールチが「ホーリンウリゲルの曲牌 4」を用いて告訴の場面を語ることが多いという。

これらの戦略を活用して勝利したモンゴル軍が、サルタウルの民の残余勢力を殴打すると、上記のジャラルディン・ソルタンという重要な人物は、敗戦を経て孤立無援な状態に陥るストーリーとなる。すなわち蓮見氏の言う「⑭一人旅」「⑮徒歩の旅」「⑯悲しみの旅」に相当する場面が考えられるため、ホールチは「ホーリンウリゲルの曲牌 10」（悲苦調）を使って、サルタウルの民の英雄であるジャラルディン・ソルタンの生涯を振り返って、現在のような不利な状態に陥ってしまった経緯を語ることがホーリンウリゲルの語り方によく見られる。

᠑	3	᠑   2	2   3	᠑ ᠑   3	᠑ · i
᠑	·	᠑   ᠑	—   ᠑ ᠑	᠑ i   ᠑ · ᠑	3
2	2	2   3	᠑ · ᠑   3	—   3	—
᠑	᠑	i   1 1	᠑   ᠑ 2	2 2   1 2 1	᠑
2	—	2	—   ᠑ 3	3 3   5	᠑
᠑	᠑	1   2	3   ᠑	—   ᠑	—

【ホーリンウリゲルの曲牌 10】

続いて、国家がモンゴル軍に滅ぼされたジャラルディン・ソルタンは、親戚と友人から離れて 1 人で戦闘しなければならない場面を聞き手に伝えるため、蓮見氏の言う「⑰故郷を離れる」に相当する段落を語る必要がある。しかしながら、ここで言う「故郷を離れる」ことは、敵国のジャラルディン・ソルタンを語ることは当然であるにしても、モンゴル高原から長い旅の苦勞を味わってサルタウルの地に走ってきたチンギス・ハーンが故郷を離れた場面を語っても良いという。重要なことは、ホールチが上記の「ホーリンウリゲルの曲牌 10」を使って泣き声が出そうのように魅力的に語ることである。その理由は、多くの聞き手は非常に悲しい曲と語りを聞くと、その場で涙を流したり、大声で泣き出したりす

るからである。

いよいよチンギス・ハーンが指揮するモンゴル軍は、討伐戦争で敵国を一掃してモンゴル高原に凱旋する場面に迎えるので、ここで蓮見氏の言う「⑱帰郷」に相当する場面が現れる。この段落を語るホールチは、必ずモンゴル軍の人々が喜んでいる様子や場面を聞き手に伝える義務があるので、上記した悲しい曲牌と正反対で、気分が晴れ晴れしている「ホーリンウリゲルの曲牌 11」（勝利曲）、すなわち宴会などの場面を表現する曲牌を用いる規定があると強調している。なぜかという、ホールチは、宴会の場面を表すとき悲しい曲を使い、あるいは、悲しい場面を伝えるとき嬉しそうな曲を使用することは禁じられているからである。

5 · 6   1 2 3 | 1 6 5   3 2 | 5 5   6 1 | 5   — |  
5 6 1   3 2 | 2 2   3 5 | 3 3   3 2 | 1   — |  
6 6   5 5 | 3                    5 | 5 5   6 1 | 5   — |

【ホーリンウリゲルの曲牌 11】

なお、人間であれば帰郷するというと、心の中でいろんなことを思い出しながら期待するだろう。ホールチが語る脚本は、芸術的に加工してから言い出しているが、偉大なるチンギス・ハーンでも例外ではないので、敵国を殲滅した喜びと故郷であるモンゴル高原に帰還する嬉しい気分を共に合わせたことが考えられる。それゆえ、ホールチが蓮見氏の言う「⑲故郷を懐かしむ」に相当する場面を語る時、物語の主人公の立場に立ってその心情をよく理解してから「ホーリンウリゲルの曲牌 12」（思念曲）に合わせて聞き手に伝えるのが適切な語り方として認められている。

6 1   1 6 5 | 3                    3 5 | 6 1   1 6 5 | 6   — |  
6 1   1 6 5 | 3                    3 5 | 6 1   1 6 5 | 6   — |  
6 3   3 1 | 2 3   1 6 | 5   ·   1 | 6   — |  
3            3 1 | 2 3   1 5 | 6   — | 6   — ||

【ホーリンウリゲルの曲牌 12】

大勝利を遂げたモンゴル軍は、チンギス・ハーンの命令を受け、本郷地のモンゴル高原に帰還する時期を迎えた。そして、村上正二氏の訳注した『モンゴル秘史』の内容によると、サルタウルの民に対する戦争に勝利した後、引き続き第 12 巻の内容を語り続けければ物語の全体像を明確に紹介できるが、本稿では蓮見氏の言う「⑳立派な勇士を讃える」に相当する場面を紹介することをもって一段としたい。特に、ホーリンウリゲルの流動性に

従うと、残りの内容を次回で紹介すると解説することは可能なので、ホールチたちは立派な勇士を讃えるとき、「ホーリンウリゲルの曲牌 13」（称賛曲）を使って韻文体と散文体が混ざった詞牌でチングス・ハーンを主とする黄金貴族とノヤンたちの功績を讃えているという。

<u>6 6 5</u>	<u>3 3</u>   <u>5 6 5</u>	<u>3 2</u>   6	—	6	—		6	—	
<u>6 6 5</u>	<u>3 3</u>   <u>5 6 5</u>	<u>3 6</u>   2	—	2	—		2	—	
<u>3 5 3 2</u>	<u>1 6</u>   <u>2 3 2 1</u>	6	—	6	—		6	—	
<u>3 5 6</u>	<u>6 6</u>   <u>2 3 2</u>	<u>1 5</u>   6	—	6	—		6	—	

【ホーリンウリゲルの曲牌 13】

#### 4、本稿のまとめ

本稿では、蓮見治雄氏の著作に記述されていたホーリンウリゲルに関する解説文およびホーリンウリゲル語り方について考察を行い、以下のような結果が得られた。

第一は、現存の文献資料を活かして、蓮見氏によるホーリンウリゲルの解説に見られる不適切な箇所を書き直した。具体的な内容は、蓮見氏による内モンゴル東部という空間的な概念、ホーリンウリゲルの発展過程と伴奏楽器、ホーリンウリゲルの詞牌と曲牌の総数やベンセンウリゲルというジャンルに関する解説が不適切であったので、筆者はその点を書き直した。その理由は、ホーリンウリゲルはモンゴル民族を代表する重要な口承文芸であるため、日本で紹介するとき、この口承文芸の正しい歴史沿革と発展過程を伝える必要があると考えたからである。

第二は、ホーリンウリゲル根拠地である東部モンゴル地区の各地域、すなわち現在の中国の遼寧省・吉林省・内モンゴル自治区のジャルト旗に活躍しているホールチを対象に聞き取り調査を実施し、蓮見治雄氏が記述しなかったホーリンウリゲルの語り方を対照したが、特に聞き取り調査によって、各部分を語るときに使用されている曲牌を明らかにした。具体的な内容は、ホールチたちが『モンゴル秘史』のような長編の脚本を語るとき、ホーリンウリゲルの曲牌を「13 曲」使っていることを明確にし、それらの曲牌は場面によって同じ曲牌を繰り返し使えることが分かった。

#### 注

- (1) この部分は、蓮見治雄氏が著した『チングス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』という著作の 99 頁に記述されている。
- (2) この部分は、蓮見治雄氏が著した『チングス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』という著作の 114～115 頁に記述されている。

- (3) この部分は、主にモンゴル研究所編した『近現代内モンゴル東部の変容』という著作と  
暁剛・池上彰英の書いた「近現代における内モンゴル東部地域の農業変遷」という論文  
を参考にして分析を行った。
- (4) (5) (9) は、主に蒙古貞夫（漢語名 楊陽）の書いた「モンゴル民族の伝統芸能ホーリ  
ンウリゲルの変容研究」という論文を参考に分析を行った。
- (6) (7) (8) は、主に2021年3月15日～5月16日にかけて、中国の遼寧省阜新モンゴル  
族自治州、吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州、内モンゴル自治区のジャールト（扎  
魯特）旗に活躍している現役のホールチを対象に実施した聞き取り調査から得られた結  
果となる。蓮見治雄氏の解説したホーリンウリゲルの語り方の各部分を解説するときの  
データは、すべて上述した聞き取り調査によって得られたものである。

### 参考文献

- 村上正二 [訳注] 『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』（全3巻）1970年、1972年、  
1976年 平凡社
- 蓮見治雄 [著] 『チンギス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』1993年 角川選書
- モンゴル研究所 [編] 『近現代内モンゴル東部の変容』2007年 雄山閣
- 鈴木仁麗 [著] 『満州国と内モンゴル』2012年 明石書店
- 暁剛・池上彰英「近現代における内モンゴル東部地域の農業変遷」（明治大学農学研究報告・  
第六四巻三号）、2015年
- 巴特爾「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格爾の動態研究：「科爾沁」地域を中心に」  
2017年 一橋大学提出の博士論文
- 蒙古貞夫（漢語名 楊陽）「モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルの変容研究」2020年  
東京学芸大学提出の博士論文
- （もんごるじんふー／東京学芸大学・教育学部・研究員）